

冬鳥ウォッチ 2009/2010 年冬調査報告

NPO 法人バードリサーチ

昨年の冬は、全国的にアトリが多く、イスカの情報も例年より多い年でした。今年の冬は、どうだったのでしょうか。4月20日までに届いた情報をもとに、今冬の冬鳥の渡来状況を解析しました。

記録状況

今冬は、2010年4月20日時点で37名の方から合計78件の情報が寄せられました。08/09年の情報件数が89件でしたので、今冬は昨年よりやや減少してしまいました。調査地点の地域別内訳は、図1に示すように、今冬も関東・東海地方が最も多く全体の63%、次いで多かったのが中部・北陸地方と近畿地方でそれぞれ20.5%と9%でした。一方、東北地方や北海道、中国・四国、九州地方からは、それぞれ2件(2.6%)と少数でした。

記録種は、5種で残念ながらイスカの記録はありませんでした。情報件数が最も多かったのは今冬もカワラヒワで51件(37.0%)、次に多かったのがアトリで34件(24.6%)、カシラダカ31件(22.5%)、マヒワ16件(11.6%)の順でした(図2)。昨年情報件数が40件と著しく多かったアトリは、今冬も情報件数の割合が高く、06/07年などと比べると大きく違っていました。また、カワラヒワやカシラダカの情報件数の割合は、昨年と比べるとやや高い傾向にありました。一方、マヒワの情報件数の割合は、07/08年の冬をピークに急激に低下していました。昨年、情報件数がやや増加し、今冬の記録率の増加が期待されていたイスカは、前述のように記録が得られませんでした。北海道の方から今冬は観察できなかったとの情報がありましたので、渡来数が著しく少なかったものと思われる。

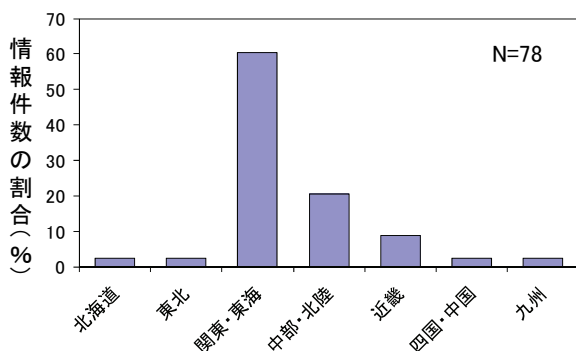


図1. 各地域の調査地点の数

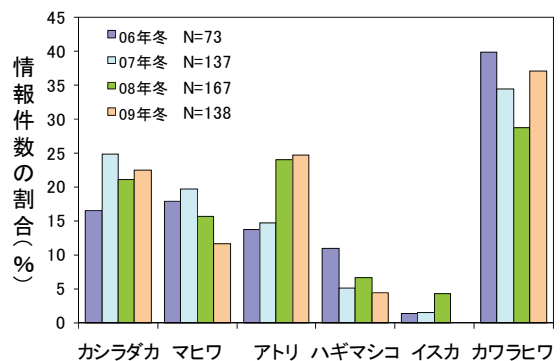


図2. 各種越冬鳥類の記録率の年変化

個体数ランク

図 3 に記録件数の多かった 4 種の個体数ランク別の記録状況の経年変化をまとめました。また、図 4 には、情報件数の多かった関東・東海地方の 07/08 年以降の個体数ランク別の記録状況を図示しました。

今冬のカシラダカは、20 羽以下の個体数ランクが全体の 6 割以上と多くを占めました。すべてのランクが記録されました。そして、51 羽以上のランクの割合が昨年までよりわずかに多かったことがわかりました。特に、今冬は 201 羽以上の大きな群れも記録されました。こうした傾向は、関東・東海地方だけを比べても同じでした。これらのことから、今冬のカシラダカの渡来状況は、ここ 4 年間ではやや良好だったと考えられます。

情報件数のもっとも多かったカワラヒワは、すべての個体数ランクが記録されましたが、78%は 20 羽以下の小さな群れで、51 羽以上の群れの割合は 2.9%しかなく過去最低となりました。この傾向は関東・東海地方も同じでした。しかし、九州地方では今年も 1000 羽の大きな群れが記録されました。昨年も、同じ地域から情報が寄せられ、昨年より多いことがわかっています。ともすると、今冬は、多くのカワラヒワがさらに温暖な九州地方へ移動したのかもしれませんが。

一方、マヒワは、前述のように情報件数が急激に減少していましたが、201 羽以上の大きな群れも記録されました。しかし、関東・東海地方の状況をみると、今年の情報件数は昨年までの半分程度で、しかも、51 羽以上の大きな群れもまったく記録されませんでした。このことから、今冬のマヒワの渡来数は全体的に少なかったと思われます。

さて、注目のアトリは、今冬ではすべての個体数ランクが記録されました。そして、図 3

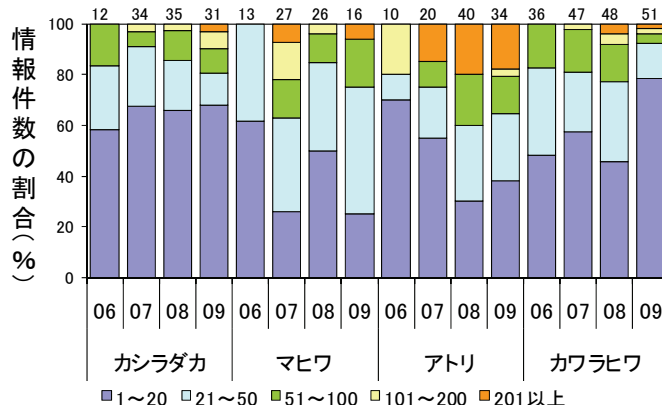


図 3. 全国の各種越冬鳥類の越冬数ランクの年変化

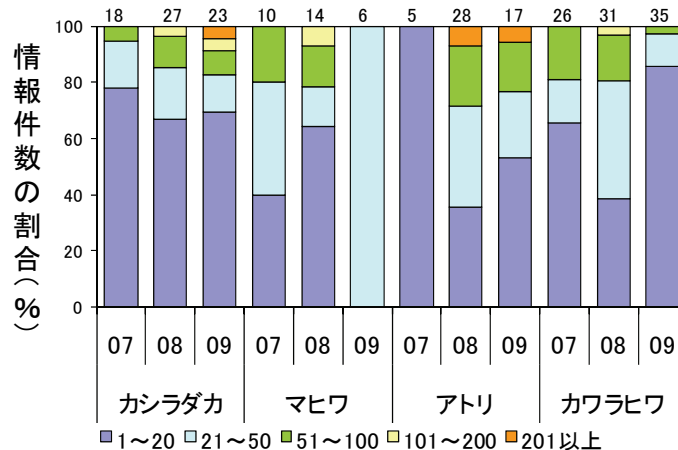


図 4. 関東・東海地方の各種越冬鳥類の越冬数ランクの年変化

に示すように 51 羽以上の大きい群れの割合も昨年並みに記録されていることがわかります。しかも、今冬は岐阜県から 70 万羽という大群の記録が寄せられました。これは、93/94 年冬以来の出現とのことです（大塚之稔氏 私信）。また、北陸地方や近畿地方、中国地方ではこれほどの大群ではありませんが、6000 羽や 500 羽などの大きな群れが記録されました。一方、昨年 10000 羽を超える大群が記録された九州地方からは、500 羽の群れが観察されただけでした。さらに、昨年は 500 羽の群れが観察された関東・東海地方では、100 羽の群れが最多個体数でした。関東地方では、昨年は東京などの市街地の公園などにも 50 羽前後の群れが多数記録されましたが、今年は森林地帯からの記録がほとんどでした。このことはバードリサーチが別に実施している住宅地周辺の調査のベランダバードウォッチでも、今冬は 07/08 年に比べると記録率が高いものの 08/09 年に比べると低いことが分かっています。これらのことから、今冬はアトリの渡来状況が良好だったものの、昨年と今年ではその渡来状況が著しく違っていたように思われます。すなわち、昨年は東日本から九州にかけて満遍なく渡来した一方で、今年は関東地方などではあまり多くなく、本州中部以西に多く飛来したのではないかということです。こうした飛来状況の地域的な偏りの理由は、残念ながら分かりませんでした。昨年は関東地方などでは秋口から市街地の公園などに飛来していましたが、今年はそうした場所では秋口にもまったく飛来しませんでした。もし、木の実のなり具合や北日本の積雪の影響なら秋口に短期間でも飛来しそうな気がします。ともすると、渡りのルートなどが昨年と今年で違うために主要な越冬地が違ったのかもしれませんが、今後、調査データを蓄積することで、この辺については何か見えてくるかもしれません。

なお、ハギマシコの今冬の生息状況は、関東地方の山岳部からの記録がほとんどで、201 羽以上の記録も 1 件ありましたが、多くは 30 羽前後でした。ハギマシコは他の冬鳥と違い山地のガレ場などに多く、低地へ降りることが少ないため、飛来していても観察者の目に止まらないのか、それとも飛来数が少ないために記録件数や個体数ランクが低いのかはつきりしませんでした。

最後に

冬鳥ウォッチも今年で 4 年目となりました。昨年の調査でアトリの渡来状況の変化に一喜一憂しましたが、今年もやはり主役はアトリでした。昨年関東などではあれほど多く姿を見かけたのに、同じ場所で観察していてもほとんど観察できないほどでした。その一方で、岐阜県のように 70 万羽もの大群が飛来しマスコミでも取り上げられるほどでした。こうした年による渡来状況の変動は、冬鳥の調査の醍醐味とも言えるでしょう。一方、今冬はアトリばかりでなくマヒワの情報からも、冬鳥の渡来状況の周期性に一つの傾向が見え

てきました。マヒワは、07/08年の冬には300羽を超える大きな群れが記録されるほど飛来数が多かったと思われます。しかし、08/09年や09/10年の記録状況をみると、年毎に飛来数が減少していることが見てとれます。また、アトリも07/08年はほとんど大きな群れが記録されなかったのが、08/09年や09/10年では大群が記録されるほどになりました。冬鳥の増加は、ある年急に増加するのではなく、山型を描くように徐々に増加したあと1,2年で下降するパターンのようにみえます。このことから、ここ2年記録数の多かったアトリは、来年の冬には著しく記録数が減少するかもしれません。次にマヒワが増加するのは何年後なのでしょう。さらに、今冬はカシラダカが少し多かったようですが、来年はさらに増加するのでしょうか。興味は尽きません。一方、昨年状況から越冬数の増加が期待されたイスカは今回記録されなかったわけですが、イスカの大きな群れの飛来はもう期待できないのでしょうか。いつか、イスカの群れが飛来することを夢に見てこの調査を続けたいと思います。

この種の調査は、皆さんのご協力が不可欠です。個人個人のデータでは限られた地域の様子しかわかりませんが、多くの地域から情報を持ち寄ることで、現在日本を舞台にして起きている鳥たちの世界の動きが見えてくると思います。そのためにも全国から一人でも多くの方の参加をお待ちしております。来年もぜひ御参加いただければ幸いです。ご協力いただきました皆さんには、来年またご協力をお願いのメールを差し上げるかもしれませんが、その際には宜しく願いいたします。

最後に今冬の調査にご協力いただきました皆様のご芳名を記してお礼に変えさせていただきます。

赤岩州五、新井清雄、井上賢三郎、伊林早苗、今森達也、植田睦之、上野尚博、植本義一、上山義之、内田博、大塚之稔、岡村和子、笠井誠吾、金子はる子、木村有紀、久保賢一、小林俊子、小堀脩男、小松周一、近藤多美子、齊藤甚造、齋藤映樹、佐藤ひろみ、高橋邦年、高間令子、栃谷満夫、長嶋宏之、野中純、花房ゆかり、平野敏明、藤波不二雄、古川セツ、堀貴司、益田耕三、三浦祝子、三代義英、村田孝嗣、矢島昭、吉邨隆資、渡辺美郎の各氏（五十音順）。

【取りまとめ 平野敏明】